

山と博物館

第14巻 第12号

1969年12月25日

大町山岳博物館



鹿島槍国際スキー場にて

撮影 山本 揚 幸

雪とこゝみ

山麓から仰ぎ見る北ア連峰は、岩と雪で色どられ、すっかり冬の衣裳をまとった。例年より早い寒波の到来で、すでにスキー場開きのニュースも耳に入ってくる。

こうして新雪の山頂をめざす冬山登山者、あるいは山麓のスキー場で雪山を楽しむスキーヤーなど、色とりどりの人々が行き交う風景は、北アを背景とした山麓の冬に欠くことのできない風物誌となる。

景観のすべてを白一色で包んでしまう白い雪は、投げ捨てられた紙屑や汚物をつぎつぎと新雪でおおいつくし、いかにも清潔な自然のたたずまいを呈してくる。雪山で遊ぶ人々はこれを良いことにして思いきり自然を汚す、その結果は雪解けの候から現れ始め、雪が終るとすべての悪行が露呈し、春の野山と開けばこみの山を思いうかべる程密接な関係をもって昨今の春の風物誌を描き出す。

とくに、利用者が多かったスキー場、あるいは冬山登山者が集中した山岳の登山路周辺はごみをたよりに歩けば霧の中でも道を間違えない程さまざまな片付け役がいるスキー場はまだ良い方である。観光客でなくいわゆる岳人と云われる人々だけが独占した山岳地帯が、良くもここまで汚し、ここまで荒らさなかつたら大自然の中で遊ぶことができなかったものかと驚かさられる。

大自然を相手に自己の全能力を試す行為が現代風のスポーツ登山といわれるものと思われ、観客席では岩と雪と針葉樹の森があなたの行動のすべてを見守っている。フェアで美しく、相手とする大自然が何であるかを知って、あくまでそれを尊重できる登山者であってほしい。

(山猿)

北ア山麓の正月三日の行事

青 木 治

北ア山麓といっても、後立山連峯の東麓、大町・北安曇を中心としたことである。

黒四ダム、黒四有料道路沿いの大町温泉郷、その続きの別荘団地等の建設、大町・美麻・白馬・小谷等十数ヶ所のスキー場の開発による六百五十戸余の旅宿、それ等の観光施設に訪れる観光客により、今まで長年祖先代々受け継がれて来た、いろいろの行事も一般化の傾向をたどりつゝ、多少の変容をなしているが、それでも北ア山麓地方らしい行事を残している。私達は近代化に急な余り、感情のこもった、祖先以来の行事を切捨てがちであるが、心の暖まるものは永久に子孫に伝えたいものである。

正月元旦

三十日の夜までに、家の大掃除をはじめ、神棚へのメ縄、恵比寿棚の巻縄(山麓独特のもの)、仏壇の清掃、門松(最近簡略化しているが、お飾の飾付け等家の内外を整え気持ちを新たに、正月を迎えることは、昔も今もそんなには変わっていない。

1 元日のお詣り

十二時を合図に「一の筆に着くぞ」「二の筆に着くぞ」とか、俺が「一の庭を踏む」「二の庭を踏む」などといって、早朝産土(うぶすな)神にお詣りするの、テレビの紅白歌合戦、除夜の鐘の放送を聞き終って、神詣りの一番乗りを競う今と相違はない。丑の刻に出て他人に出会わぬようにすれば御利益があるといつて、わざとずる人も昔はあった。大町の王子、宮本の神明宮、池田の八幡様は今も昔も特に賑やかである。また除夜の鐘の鳴り出すのを合図に財布を縫い初め、これにお賽銭を入れて、お詣りすれば、一年中お

金に不自由しないという。

2 朝の焚付け

今はガスや電気であるが、昔は地炉(ちろ)(ゆるり、ゆるり)や「かまど」の元日の朝の焚付けは、豆稗(まめがら)ですもの、必ず男が炊き付けけるものとした。一年中「まめ」(健康)であるように、女は汚れがあるという意であつたらうか。また元日の朝、地炉(ちろ)に足を入れると、雀や鳥が苗代をこねる、この地炉(ちろ)を汚くしておく、田や畑に草が生えるとか、子供の頃足を入れて両親に叱られた経験のある年寄は多いことであらう。

3 若水(わかみず)・福茶・齒固

水汲み場や井戸屋には餅やお洗米を供えるか、洗米や塩を撒いて清めるか、井戸の中や流れに、米を三粒だけ「毒水除け」と称えながら三度汲みこぼし、四度目の時に「若水かわりて目出たい寿福福徳下さい」と三遍唱えて汲むか、「目出度さに心嬉しや母屋の井戸」といって、多くは明きの方に向って汲んだものだ。

この元日の若水は男が汲むもの、古くは年男が汲むもの、また新しい藁草履を履いて汲むものと気持ちをこめたものであるが、今は飲料水の水道化により、若水の意識は変らなくも、その方法は昔のかがめもない。若水を沸かしお茶を入れ、年神様、神棚、恵比寿様、仏壇に供え家族揃ってお茶を飲むことを福茶という。

お茶の時柿、栗、煮豆、大根煮、煎餅を食べることを、齒固めという。柿は、かきまわりのよいように、栗は、くりまわりのよいように、煮まめはまめまめと、大根煮は代代統くように、煎餅は一枚食べても千べい(千歳

)と言って、子供も大人も一家揃って、皆んなで食べる。腹を病まぬようにといって、ほおつきを食べる家もあるし、小谷・白馬ではかやの実も食べたものである。

4 元日の食事

正月は「とそ」はつきもの、朝お神酒を「とそ」として飲む家もある、朝食は大根、にんじん、昆布、かんぴょう、竹輪、凍豆腐を入れた雑煮か、焼いた餅に、洗米田作り、豆など、年神様や神仏に供えて後に雑煮を食べた。また朝食を芋汁にして、一年中するすると滑りのよいようにといつて食べる所も多い芋汁にする風邪を引かないともいう。大体元日に雑煮なら二日は芋汁、元日に芋汁なら二日に雑煮というふうになり、三ヶ日の中に全々餅を食べないことはない。夕食には長く続くようにといふ縁起をとって、うどんやそばを食べることにしてきた。元日の御馳走の中心は、ぶりと餅でさけ、いか、たこ、田作り、数の子、蜜柑などであったが、今は食生活の進歩で、内容がぐっと進んでいる。

5 元日の俗信

元日を寝転んで過すと、ぐうたらになるとか。元日に子供を泣かせると年中泣くとか、この日に銭を使うと、一年中銭の出が多くなるなどといつて、年頭の第一日を大切にすると風がある。また元日の朝掃除をすると、福の神を掃き出すとか、朝外出の時は必ず明きの方から出なければいけないという俗信もある。

正月二日

仕事初めといつて、農家では、男は馬の沓(くつ)を作ったり、秋に稲を束ねる「すげ縄」を一駄(六本)作って恵比寿様か、かま神様に上げるか、大黒柱にさげた。女は縫初めと



門松 (右-旧来のもの。左-簡略化され、印刷物になつた門松)

正月三日

夜は三日年取を行なう。またべろべろの年取り、かま神様の年取り、汚れ年などともいって、鍋や釜のお勝手用具に年を取らせるといふ。昔はこの日に小豆飯をする所が多かった。かま神様には握飯三個を、目簀か膳か井などのせ、べろべろ(白木の箸か麻桿か芋の茎等の二五cm位のものを、頭三、四cmを折り曲げたもの)を一本宛挿してかま神様に進める。(大町北安曇編纂委員)

食物を貯える習性

宮尾 嶽雄



野間貯金のマスコツト「ユウちゃん」はシマリスである

1

食物を貯える習性は、多くの哺乳類にみられる。食物は動物にとって、環境との結びつきの中で、最も基本的なものである。したがって、食物を得ることに関する適応は、動物の基本的な機能であるということが出来る。食物を貯える習性は、食物の量や質が、季節ごとに著しく変化する温帯や亜寒帯、雨季と乾季が交代する熱帯の一部の地域にすむ動物にとって、きわめて重要な適応の一環をなすものである。食物が豊富な季節に著しく肥満して、体内にエネルギーを貯え、また、食物の欠乏する季節に休眠したり、または他の地方へ移動したりする習性も、貯食と一連の関係をもちいた適応の表現とみるのが正しいと思われる。

2

北極地方のクマ、キツネ、オオカミなどは、しばしばその獲物の一部だけを食べ、残りを雪の中や凍った地中にかくすことが知られている。獲物に手をつけずにかくす場合もある。冬の間は雪の中に埋めるが、夏には砂や軽い土の中に埋めて、注意深く被うのである。キツネの場合で見ると、後になってその貯蔵食料を容易に見ると、その通路に沿って、人間が肉を埋めておいても掘り出そうとはしない。自分がかくしたものを記憶しているものと思われる。

モグラでは、巣の中またはその近くに食物を貯えることがよく知られている。貯食の主

なものミミズで、トンネルの壁の中に埋めたり、トンネルの中にかためてあったりする。これらのミミズを調べてみると、たいがい頭部に傷がつけられていて、動けない状態になっている。死んでいない証拠に、いろいろな程度に再生が進んでいる。ヨーロッパでは古くからモグラのこの習性が注意され、Dahl(1886)は二一八〇匹のミミズと一八匹のコガネムシ幼虫が、巣とその近くのトンネル内に貯えられているのを見つけ、Bos(1898)は三百匹のミミズが貯えられていたと報告している。このようなミミズの集団は、一時は単なるミミズの冬眠集団だと考えられたこともあったが、さきに記したように、故意に傷をつけて動けなくしてあることから、明らかにモグラのしわざである。飼育中のモグラでも食物を貯えることが観察される。しかし、貯えたミミズを後にモグラが利用するかどうかについては確かめられていない(Godfrey and Crowcroft, 1960)

3

ウラル地方のステツブにすむナキウサギ(Ochotona pusilla)は、草や葉のついた木の枝をかみ切って乾燥させ、これを集めて干草の山を作る。総重量三キログラムにも達するとい一日二〇〜二五グラムの干草で充分生活できるから、この貯食で、四ヶ月間は大丈夫といことになる。中央アジアの草原にすむ別種のナキウサギ(Ochotona daurica)は、直径一センチ、高さ四〇センチもの干草の山

を作るという(Formozov, 1966)。

食べ残しの枯死した草を冬の間に利用することが、干草貯蔵の習性が発達する第一段階であろう。特にステツブやサバク気候の地方では、かみ切って地上に残した草や枝は、たちまち乾燥してしまふ。したがって彼等の餌として価値あるものが、大量に保存されるわけだ、精巧な貯蔵方法が発達する自然の条件となっている。このような干草を積み上げた岩、岩かげに集めることで、貯蔵の目的が達せられるのである。このような好都合な条件は高山地域にも存在する。こうして集めた干草を、風に吹き散らされたり、有蹄類に略奪されたりするのを防ぐため、干草置場のまわりを石積みでかこうようなことも行なわれる。

ハタネズミの一種(Aligolia strachovi)は、干草置場の壁を作ったり補修したりするため、一日に一匹で二キログラムもの小石を運び、春から秋にかけて、一家族で三〜八キログラムもの干草を集める(Shubin, 1969)。

リスにも食物を貯える習性が発達している。松類の球果、ドングリなどを穴に運びこみ、また、キノコをとっては木の枝につきさしておき、これは自然に乾燥して貯蔵食料となる。もし、これが個体にとって無益だとしても、このようにな貯蔵は、個体群全体としての生存にはきわめて重要なものとなる(ナウモフ、一九五七)。飼育しているリスも、食物の残りをおくすことをするが、それが腐りだしてもしらんで顔いろ。野外では冬の食物の乏しい時期に、秋の間の貯食を利用するのは確かであるが、実際に食べるのはわずか一〇パーセント程度らしい。

北海道や大陸のシマリスは、冬の間半睡状態で地下のトンネル内に作った巣の中ですごす。トンネル内には食物貯蔵所が作られ、シ

ナノキ、ハンバミ、ドングリ、穀粒、キノコなどを大量に貯えている。そして冬の間、時々目を覚ましてはこれを食べ、春になってからははじめのうちはこれを利用してはいる。クマはシマリスのトンネルをみつければそれを掘りおこして貯蔵食品を盗み、リスにもそのような習性があるという(ルカーシキン、一九三九)。

4

ネズミ類には食物貯蔵の習性が著しい。草食性のハタネズミ(草原、田畑、植林地などに多い)は、稲穂、桑の根、茶の根、タバコの葉、草木の種子などで、いろいろなものをトンネル内の貯蔵室に運び込む。根は同じ長さで切りそろえて規則正しく並べられ、稲穂は二〜一五種の長さに切りそろえてあると一わられる(佐木々、一九〇四・川村・池田、一九三五など)。巣から少し離れたところ(次頁へ)



アケネズミの貯食

冬山をめざす人々へ送る手紙

芝波田 一 美



新ガ岳の稜線をゆく登山者

冬山をめざす人々へ。
 信濃の里にも早雪が舞い、北アルプスの山々は真白に雪化粧される季節がやってきました。岳人の皆さんは冬山への準備に心せわしい事と思います。

一般に冬山登山は年末から年始にかけて集中し、それに次いで三月の連休に多くなる傾向が見られます。したがって年末年始に一番多く入山するので、遭難もまた一番多い事になります。

事もありますので信じ切れない点もあります。が、ともあれ年末年始の頃は、一べんにたくさん雪が降る時期であり、好天に恵まれる事が極めて少なく、いきおい遭難事故も多くなる訳です。

一方年末年始には登山者が集中するので、未熟な登山者も気が強くなり、一緒にどこかのパーティについて行動すると良いとかあるいは困った時にはどこかのパーティに助けをもらえるなんて考えを持って入山する者があ

る様です。
 こういふ人達は、他のパーティがあてにならぬ事を充分に心得て戴きたい。他のパーティの人達はそんな心はつゆ知らぬ事です。地元では遭難が絶対に起らない様に何かと気を配り、心配して居

当然と云えば当然かも知れませんが、ここで一番多いという問題について少し考えてみたいと思います。

年末年始は学校が長い休みになる、会社なども休みが長いからこの時期に登山しようとする事になるものと思います。

ところで、この時期は気象台の方からの予報も毎年出されるが、良い天候に恵まれません。現実には予報に反し好天に恵まれた

りますので充分注意して戴きたい。
 来る年も来る年も条件が悪く、計画通りに行動できない事をくやんで計画を強行するなど、危険な行動をとる事は絶対止めて下さい。恵まれた条件で楽しい冬山登山ができる事を祈りまして冬山をめざす人々への助言とい

(大町市登山案内組合長)

(前頁より)

ろに行きどまりの広い部屋を作り、それを貯蔵室とする(渡辺、一九三七)。
 ハタネズミに限らず、一般に野ネズミはトンネルの外で食物を見つけると、トンネル内にそれを持ちこんで食べる習性があるので、秋に草木が枯れこんで、食物が豊富になると、いきおい食物が食べきれず、トンネル内に貯まることがになる。前に持ちこんだものが、どんなに好物であっても、外から持ちこんだものを先に食うという性質もあり(三坂、一九五五)、結局、食物の量が多いと食べ残されることになる。歴史的にみて、このようなところに貯食習性の出発点があるろう。食物が豊富になること、温度の低下、日長の短縮は、貯蔵本能の出現を促すという(スウィルディン、一九五七)。

アカネズミやヒメネズミは林にすみ、種実を主食とするが、これらも貯食習性が強い。食物が特殊なものにかたよった種類では、貯食習性も強くなるのが当然であろう。八ヶ岳亜高山森林帯には、ヤチネズミ(草食性)とヒメネズミが多い。夏の間はヒメネズミの方がワナに多くかかるのであるが、冬にはヤチネズミばかりで、ヒメネズミは殆んどとれなくなる(宮尾ほか、一九六三)。これはヒメネズミが貯蔵食物によって生活し、冬の間は外で餌をとることが少ないためであるろうと考えている。

五月上旬にアカネズミの巣を掘りかえしたところ、ヤマモモの種子とクルミの貯蔵がみつけれられたことがある。クルミが五ヶ、ヤマモモの種子が二九ヶ、全部で八五グラムであった(写真)。その中には堅果をかじって中身を食べたものが混じっており、冬の間食べきれなかったものとみられる。試みにクルミを割ってみたところ、果肉は新鮮で、保存の条件がきわめて良好であったことがわかる。ヨーロッパのハタネズミ(Microtus arvalis)は、秋に地下茎や球根を貯え、冬の間それで生活するが、これらの食物はきわめて新

鮮な状態に保たれているという。
 人類の採集経済の時代には、そして農耕時代に入ってから、大飢饉の年などには、こうした野ネズミの貯食を見つけることによって、命をながらえたというようすが、しばしばあったのではないだろうか。

『ここに出づる所を知らざる間に、鼠来ていはく、「内はほらほら、外はすぶすぶ」と、かく言ひければ、其処を踏みしかば、落ち隠り入りし間に、火は焼け過ぎき。ここにその鼠、その鳴鐘を咋ひて出て来り奉りき。その矢の羽は、その鼠の子どもみな喫ひたりき。』

という、古事記(角川文庫版による)の有名な説話も、『ネズミの浄土』という昔話も、ネズミ類の貯食習性と人間とのかかり合いを暗示しているのとみるのも、一つの解釈だと思いがたうであろうか。

ドブネズミやクマネズミのような住家性で人間の生活に密着しているものには、普通は貯食習性が明らかでない。しかし、野外で生活しているドブネズミでは、時に食物を貯えることがあり、胸部に咬傷を受け、半死の状態にあるニホンアカガエルが、ドブネズミの巣の中に多数貯えられていた例を、直良信夫氏(一九四一)が記録している。

× × ×
 郵便局の窓口においてある郵便貯金をすすめるチラシやマッチには、シマリスがデザインされている。昨年(一九六八年)は、『貯蓄で自立』という標語の入った一五円切手が発売されたが、それにもシマリスが描かれている。シマリスの貯食習性を、郵便貯金に結びつけたアイデアなのである。

(信州大学医学部講師・医博)

山と博物館 第14巻第12号
 一九六九年 十二月二十五日発行
 発行所 長野県大町市 T.E.L.大町③11
 印刷所 大町市下仲町 山と博物館
 印刷部 大町市下仲町 山と博物館
 定価 年額 三〇〇円(送料共) (切手不可)